

はじめに

山振の 立ち儀ひたる 山清水

酌みに行かめど 道の知らなく

(高市皇子尊)



城戸武男建築事務所



外観



左上 | ダルドヴェール (製作: 中日スタンドアート)
左下 | かつて設けられていた「牛馬用水」をイメージした中庭
右 | 礼拝堂 (椅子製作: 愛知)

所在地 名古屋市
施工 大成建設
構造・規模 RC造 地上2階 地下1階
建築面積 718㎡
延床面積 1,909㎡
竣工 2010年
撮影 SS名古屋
(設計担当: 安藤英治)



左上|玄関 右上|ホール 左下|同窓会サロン 右下|和室

凜とした白百合、 世代を超えた教育の場に

金城学院中学校高等学校 校長 深谷 昌一



本校は中高一貫教育を実施しているが、キャンパスは別々である。高校にあって中学にはないもの、それがキリスト教教育の学校として不可欠の礼拝堂だった。入学早々にキリスト教教育を体感させたい、そのための礼拝堂をぜひ中学につくりたいという強い願いが今回の発注へと繋がった。

概要としては、光、風、音をコンセプトにしてそれを中学生たちが体感でき、200名ほど収容できる礼拝堂を中心に、同一階に多目的に活動できる場を、下の階には生徒たちの教育活動を下支えるかのように卒業生の活動スペースを備える建物となった。礼拝堂は、神からの祝福・恵みの光に満ち、命の息吹を感じる風が循環し、静寂な音の空間は心静める場となるように設計された。

「主を畏れることは知恵のはじめ」というスクールモットーに即し、白百合館という名にふさわしく、白を基調とした外観は凛と立つ白百合をイメージしたものとなっている。校章の白百合とも重なり合い、中学でのキリスト教教育の象徴といえる建物となった。

この建物が近い将来、卒業して行った者と入学して来た者との世代を超えた教育のコラボレーションが促進される場となることを期待している。

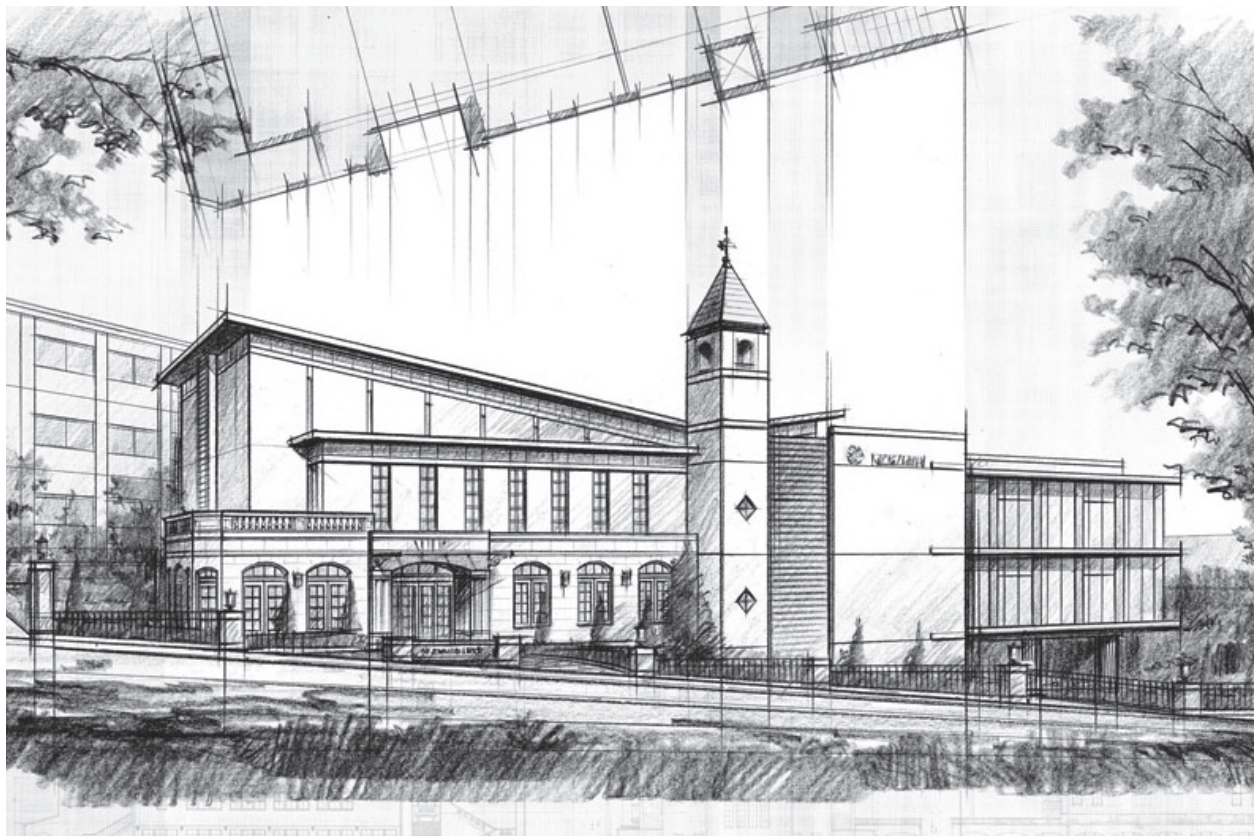
白百合館のこと

高校の栄光館の実施設計が祖父であったことから指名コンペに参加でき、当社の案が採用されました。外観は高等学校の栄光館と同じくシンボリックで金城らしさを感じられるモノとし、機能的には同窓会の強化と災害時の生徒の安全確保を加味しました。

礼拝堂の形態はコンペ案を大幅に変更し、自分と向き合うための静寂な場を演出しました。和室は学校の特別教室にありがちなモノでなく、伝統的な日本の建築空間とし、本格的な水屋を備えています。ホワイエのダルドヴェールの絵柄は校章の白百合と葡萄です。白百合館は取り壊された白百合寮から名を受け、館銘版の文字は佐藤作業所長の配慮で保存されている当時の白百合寮のものが複写できました。また、学院の山田顧問には工事完了まで学校・同窓会の調整など多岐にわたりご配慮いただきました。

金城学院の中・高では裾野の広い教育が行われております。これまでの歴史・伝統とこれからの変化に対応しながら栄光館のように永く愛されることを願います。

祖父と私、二代にわたり金城学院の校舎新築にかかわれたことに改めて幸せを感じ、この機会を与えて下さった学校関係者の皆様には深く感謝しております。（城戸康近）



外観イメージパース（プロポーザル時）



かわるものがある、かわらないものがある。
 かえてよいものがある、かえてはいけないものがある。
 我々にはまもるべきものがある。

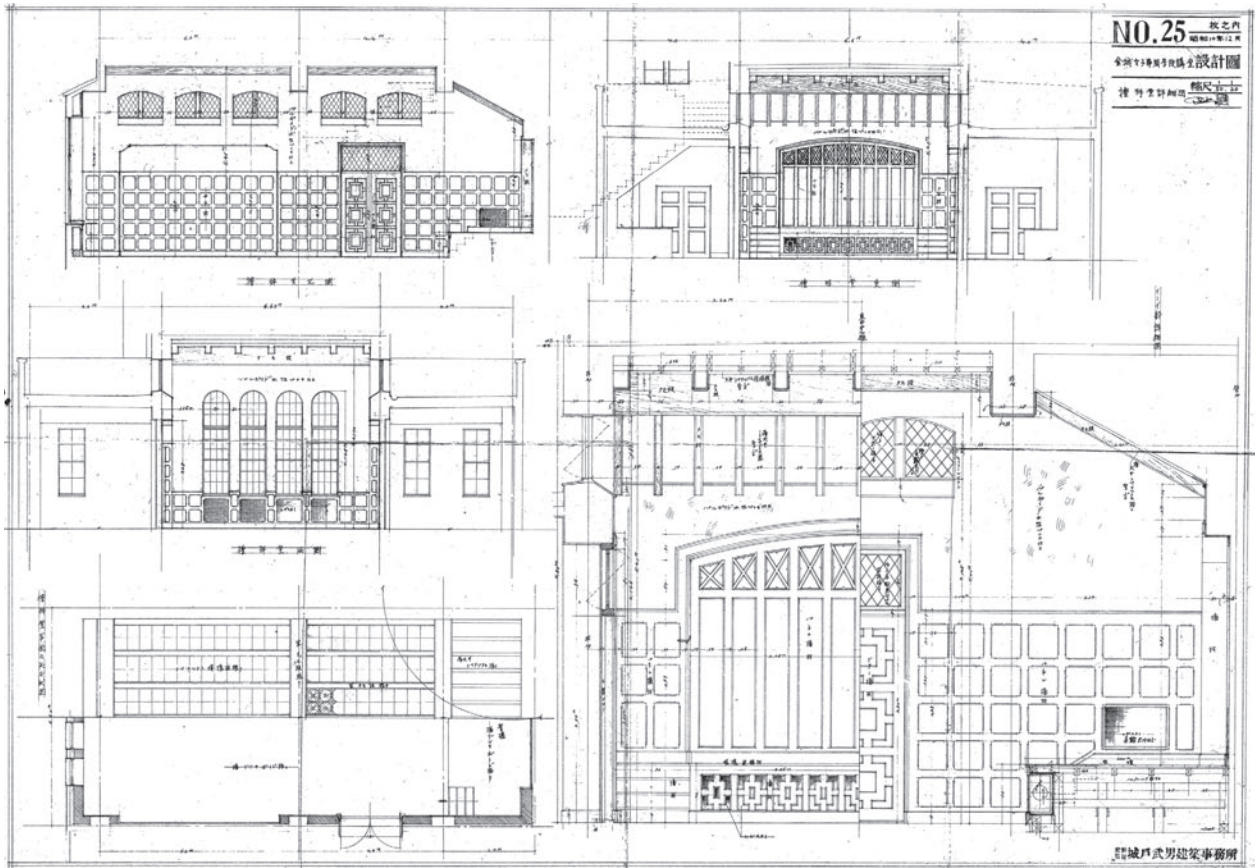
- 1 表紙
- 2 コンセプト(1)
- 3 コンセプト(2)
- 4 外観イメージパース(1)
- 5 外観イメージパース(2)
- 6 内観イメージパース
- 7 鳥瞰イメージパース
- 8 配置図
- 9 平面図
- 10 立面図・断面図

金城学院中学校礼拝堂など
 新築設計業務
 指名型プロポーザル企画提案書

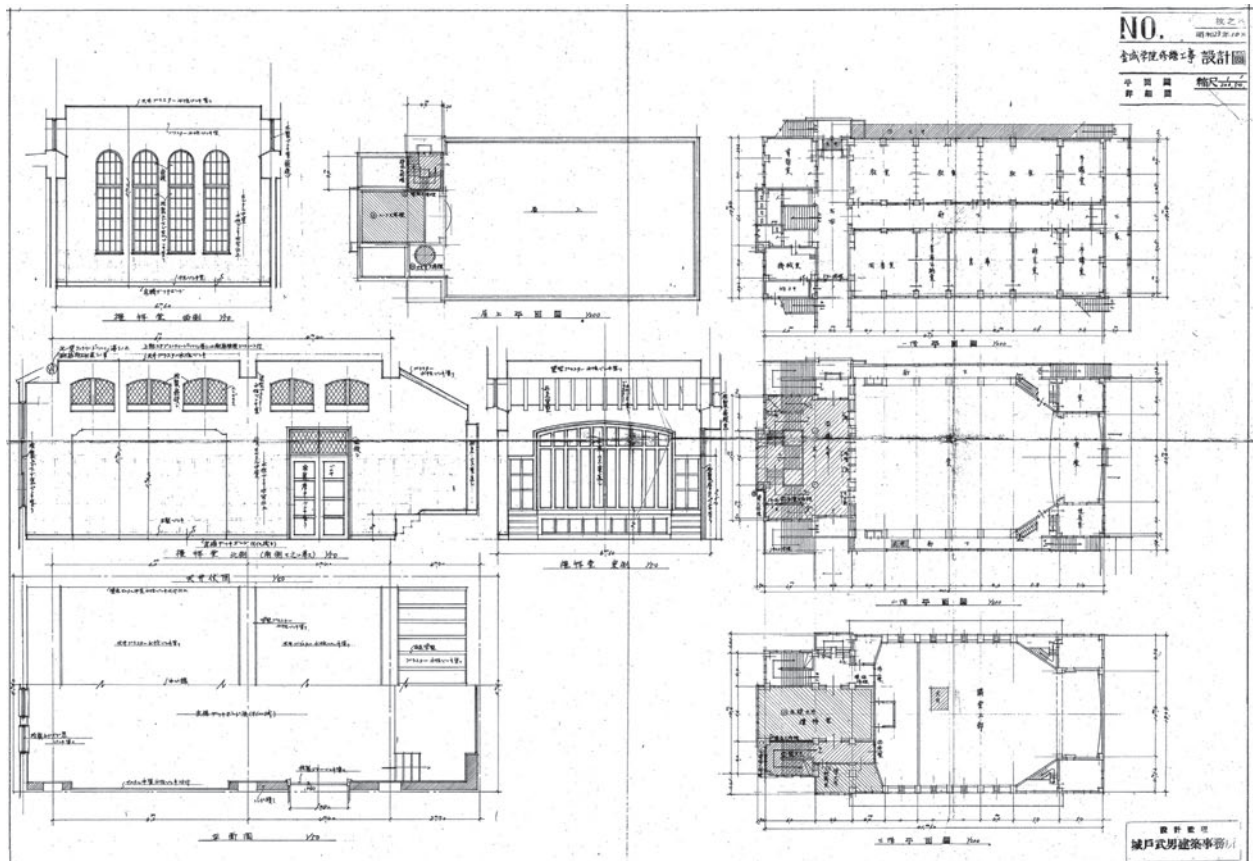


栄光館

● 城戸武男建築事務所に保管してある城戸武男氏による図面



昭和 10 (1935) 年のもの



昭和 23 (1948) 年のもの



戦争で被爆（金城学院の百年史より）

左 | 現在の栄光館
右上 | 礼拝堂
右中 | ホール
右下 | 階段室



栄光館のこと

白百合館の工事中に偶然、戦災で被弾した栄光館の写真を目にしました。階段室手摺りの大理石が部分的に色が違うことから戦災を受けたと聞いてはいましたが、あれほどの大破であったとは思っていませんでした。ここまで修復されたことに驚いています。当時の学校関係者ならびに同窓会の方々の想いをご尽力には只々感謝です。

栄光館は昭和10年、竹中工務店から独立して間もない祖父が実施設計をし、75年前の原図は今も当務所に保管されています。戦前の図面は数えるほどしかない中で運良く戦災を逃れたひとつです（一

部を前ページに掲載）。改めてよく見てみると、昭和23年に大破した部分の改修図が作成されていました。戦前の礼拝堂の原図と現在の写真にあるように、戦後の物資が十分に調達できない時代ゆえに仕上げは様変わりや余儀なくされています。学院の百年史に焼失前の礼拝堂の写真がありますが、職人の手による繊細なディテールが見られないのは残念です。

金城学院にとってシンボリックな建物である栄光館は平成10年に登録文化財に指定されました。その後、階段室の壁を耐震壁にしたため一部の窓はなくなりましたが全体の雰囲気は保たれています。適度なメンテナンスにより丁寧に使われていることは同じ設計者として祖父を羨ましく思います。（城戸康近）

所在地	名古屋市中区
基本設計	佐藤隆
実施設計	城戸武男
施工	広瀬商会
構造・規模	RC造一部S造 地上3階
竣工	1936年
撮影	SS名古屋

栄光館と白百合館手技の魅力、継承していくこと

名古屋工業大学助教 夏目 欣昇



金城学院栄光館（1936年完成）は東海地方の近代建築を語る上で欠かせない建築家・城戸武男が実施設計を担当した。彼の戦前における代表作のひとつである。ところで、栄光館には名古屋空襲で爆撃を受け大きく損傷した過去がある。城戸武男建築事務所に残されている栄光館の設計図や写真などが当時の情景を伝えてくれる。例えば、新築時の設計図（1935年）と戦災修繕時の設計図（1948年）を見比べると、損傷の大きかった礼拝堂は内装が簡素化されて修繕されていることがわかる。また、金城学院100年史によれば1970年代末に図書室の改装が行われるなど、改修を重ねて使われてきたことがわかる。積み重ねた記憶によって醸成された愛着が建築を生きた空間へ転化させる。そうした様子うかがえる建築として今ある。

そして、金城学院中学校の新たな象徴として白百合館が落成した。城戸康近氏の設計である。この建築では、礼拝堂と同窓会館の複合が図られており、道路に沿って適度なヴォリュームが折り重なる構えとすることで、軽やかな景観が創出されている。意匠面では、栄光館や牛馬用水（フローラ・パンズ・ファウンテン）など親しまれてきたモチーフを組み込み、記憶の風景化が試みられている。白百合館に用いられた建築言語には伝統を受け継ぐ姿勢が明朗に表れているといえよう。

また、藤田（旧赤津）邸（1958年、株大林組名古屋支店設計施工）の改修も興味深い。この住宅は、名古屋地区における鉄筋コンクリート

造のモダニズム住宅として貴重な事例である。改修により原型を保ちつつ、繊細なディテールが光る静謐な室内空間を蘇らせている。

康近氏は、設計図と当時の住宅雑誌と対峙し、そこに込められた記憶や意図を読み解きながら計画をまとめたとのこと。これらの仕事には、設計の流儀が息づいていると感じた。つまり、伝統と創造の融合を実践してきた結果、築かれた事務所の作風が建築に表れている。

先日、栄光館と藤田邸（旧赤津邸）の設計図を拝見した。精緻に書き込まれており、手技に思わず嘆息をあげる。保存状態が良い。手書き図面は、建設するための情報を的確に伝える媒体として優れるCAD図面に取って代わられてしまった。しかし、設計者が建築の形を決定するまでに積み重ねる思考の痕跡を微妙なタッチの表現の中に感じ取れるからだろうか、創案から実体化までの大きな流れを見渡す想像力がかきたえられる。手書きの魅力はそんな部分にあると思う。

事務所の図面保管室も見せていただく。第二次大戦前後の頃の、大量生産品と思われる洋紙による図面は劣化がはやく、至急対策が必要な状況にあるようだ。現在、康近氏は、劣化による原図喪失や研究資料としての問合せに対応するため、電子データ化を進められている。

建築の寿命は、つくり手と使い手、そして伝え手の思いで伸びも縮みもする。設計図は、建築の寿命をはかるための大きな手がかりである。建築を完成させるためだけのものではない。また、今後の建築を議論する上でも欠かせない。将来の活用に向けて、設計図をいかにして体系的に整理し、資料化していくか。そのためには、生の声を残す活動も必要であろう。そもそも、設計図を資料として維持しつづける動機付けについても考えなければならない。先達の隠れた英知を継承していくためにも、こうした活動に積極的に協力していきたい。



左上 | リフォーム後
右上 | 全景 (夜景)
左下 | リフォーム前
右下 | 玄関を見る

所在地 名古屋市
竣工 1958年
設計・施工 大林組
構造・規模 RC造2階
改修工事 川村工務店
2008年完成
建築面積 245㎡
延床面積 275㎡
撮影 そあスタジオ

だんらんのある家

建て主 藤田さん



妻の父が53年前に建てたこの家は応接間や客間、父がでんと座る居間など父親が強かった時代背景を反映した設計になっていた。残りの空間に家族の部屋やキッチンがあり、当時まだ珍しかったRC造りで頑丈だけど冬にはとても寒く、浴室は改築前には排水に支障が出ていた。

そんな家を現代のライフスタイルに合うような快適な空間に変えるために、応接間と客間を残してリフォームをして私たち家族が住むことになった。

まず耐震性の改善のため耐震壁を増設した。さまざまなリフォームへの夢が現実と擦り合わせる過程で消えた中で、最後までこの時ストーブだけはこだわった。改装後、家族志向のお父さん(私)が座る場所である。防火対策や給排気などの要件を苦労してまとめていただき感謝している。

新築当時のオリジナルの家具も修理をした。ストーブの外観とマッチして気に入って使っている。

今は冬場の一家だんらんの場所なり、炎の揺れる様を眺めながら過ごす冬の時間は何物にも代えがたい。

きっと昔の囲炉裏端もこんな空間だったのだろう。

藤田 (旧赤津) 邸のこと

これは1958年に竣工したRC造の住宅です。同年は私が生まれた年であり、運命的な出会いでした。当時、藤田さんのお義母様が1人でお住まいで、相続、介護などを含めた計画を依頼されました。

マンション建設の計画もありましたが「取り壊してしまえば50年間の家族の記憶も風化してしまう」という考えに賛同いただき、避難施設同等の耐震性の確保と介護に備えるプランで再生することとなりました。

建物の仕様は外壁は寒水石を使った雪色の人造石塗り洗い出し、床は桜フロリング、壁は赤レオの豎羽目張り、天井はマンガシロのベニア張りで築50年が経っていましたが、職人の手の良さが随所にうかがわれる住宅です。その質を保つために、施工は祖父の代からお世話になっている川村工務店(株)とし、職人と細かいやり取りをしながら現場を進めました。

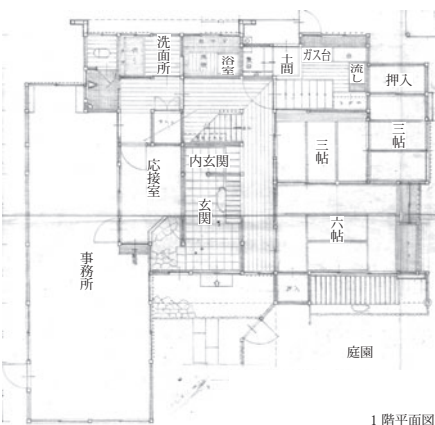
マントルピースは薪ストーブに替わりましたが、当時と同じように「主人の居場所」がある住宅となりました。(城戸康近)



新築当時『新住宅』で特集された



上 | 玄関
中 | 六畳間



1階平面図

所在地 名古屋市中
構造・規模 木造2階
竣工 1948年
撮影 瀬口吉則

城戸邸について

城戸武男建築事務所 城戸 康近



都心のビルの谷間にひっそりと残っている門（扉ページ写真）。この木賊張りの門をくぐり、珊瑚樹の生垣と短冊延石による路地を通ると玄関に至ります。玄関を入ると右側沓脱石が自宅、左側が事務所の入り口です。ここが昭和23年から平成6年まで使われた自宅兼事務所の玄関です。沓脱石から取次の用をなす廊下の壁に大ぶりの女竹下地窓があり、この奥が祖父の六畳間。この玄関から六畳間に至る空間に祖父が追求した伝統的な数寄屋があります。当時はまだ建築資材が不足しており高価な材料は一切使われていませんが、凛とした緊張感が漂う空間です。

この家はある意味、祖父そのものです。今同じ仕事をする者として改めてこの家から祖父を感じとれます。この家に私は生まれ、昭和63年まで住んでいました。大学に入るまで祖父が建築家であることを知らずに育った私にとっては只々厳しく怖い祖父ではありましたが、実は人を想うとても優しい人でもありました。といっても、そのことが分かったのは祖父が亡くなってからのことですが、ここが私の始まりです。

◆結び

私の師である藤川壽男氏によれば祖父の設計姿勢は、建築家は鑿一つ鉋一つ持つことはできないのだから職人の存在を尊重し、彼らと心の接触を感じて建築づくりに努めるべきだとの信念を持っていました。

業界を見渡すと昨今の経済状況ゆえかコストが先行し、なかなか職人の手技にこだわるのが難しくなっています。

職人と共に同じ作り手としての想いを持ちながらできたモノは、長い年月を経ても使い手の愛情によってカタチを変えながらも受け継がれていきます。正しいことが難しい時代ですが我々には守るべきモノがあります。



左 | 祖父との写真。左が筆者
右 | 昭和40年の旅行。藤川壽男氏撮影。左から6番目が筆者の父

在籍所員一覧（1933年11月～2011年4月）

城戸 武男	岡 整一	宮口 真英	後藤 清長	森 久美子	三浦 紀生	森永 俊和	片岡 達哉	安藤 英治
松本 和恵	中村 順吉	小川 嘉彦	南井 邦之	佐藤みゆき	岡田 貴子	孕石 順昭	城戸 康近	高橋 恵子
城戸 久	志水 正弘	鈴木 達也	犬飼 正光	城戸 昭子	山口 徹	丹羽 満	勇 慶典	
杉山 茂	佐治 淳	藤川 壽男	祖父江達夫	大川 笑穂	野崎 由典	塩原三四子	青山 修三	
福永 万八	加藤 智弘	山田 俊平	竹田 幹根	細江ふじ江	森野 一	加藤 大和	芳川 昌彦	
玉置 隆治	上野 景正	安井 秋信	山田さよ子	福沢 良太	伊藤 恒夫	武田 和枝	鬼頭麻衣子	
石川喜代治	牛山 勉	岡 義男	仙石三千代	阿知波 広	打田 恭子	菅野 良二	牛山 波	
城戸 及	星野 正夫	松本 勇	前野 初像	岡田 貴子	吉田 英隆	大町 哲也	山本 純也	
城戸 讓	西脇 寿郎	村瀬 正	豊島 洋子	田中 邦彦	西山 雅彦	橋本 秀純	朝本あゆち	